

近世後期における「日蓮聖人伝」の出版

— 小川泰堂を中心とした在家居士の著作活動について —

冠 賢 一

はじめに

近世後期における日蓮教団の動向の一つに在家居士による仏教運動がある。日扇の仏立講、松平頼該の本門八品講は、黒住教・天理教・金光教等と共に幕末の民衆宗教の一つとして位置づけられている。^①

また、宗教集団の組織こそしなかったが、小川泰堂・深見要言・中村経年等、日蓮宗在家信者による著作・出版といった仏教運動は極めて多い。日蓮聖人伝のみに限っても加倉井忠珍『日蓮大菩薩記』、深見要言『本化高祖紀年録』、『本化高祖累歳録』、平維貞『高祖大師年代記』、中村経年

『日蓮聖人一代図絵』、小川泰堂『日蓮大士真実伝』等をあげることができる。これら日蓮聖人伝の著作出版とさらには小川泰堂『高祖遺文録』に代表される在家居士の御書出版といった動きは、この時期に始めて見られるものであり、近世後期在家信者による仏教運動の特色を示すものである。

ここでは、特に在家信者側から著作出版された種々の日蓮聖人伝（以下、祖師伝と略称）と慶応元年（一八六五）に『高祖遺文録』（以下、『遺文録』と略称）三十巻の校訂を完成し、同三年には『日蓮大士真実伝』（以下、『真実伝』と略称）を出版した小川泰堂居士の著作活動が、近

世後期の日蓮教団の中でいかなる役割をはたしたかを問題とする。②

日蓮聖人の御書を体系的に拝読することの出来なかつた時代においては、庶民にとってイメージとしての日蓮聖人像を構築していったのは、それが読まれたものにせよ、語られたものにせよ、見られたものにせよ、日蓮聖人の生涯を語りあかした伝記であった。現在我々は『昭和定本日蓮聖人遺文』を始めとする諸々の御遺文集によって、日蓮聖人の全御書を体系的に拝読することができ。しかし、なおこうした日蓮聖人御書と共に、庶民における日蓮聖人像の形成に大きな役割を果しているのは、種々の祖師伝であろうと考えられる。

したがって、とりわけ幕末から明治以降現在まで庶民の日蓮聖人像構築に大きな影響を与えたと考えられる小川泰堂の『真実伝』を取り上げ、泰堂が本書を著作し出版した意味とその影響を考える。そして、近世後期におけるこれら在家居士の著作活動が、近代仏教の形成にいかなる役割を果たしたかを、かかる側面から考察し、近代日蓮教団史理解の足掛かりとしたい。

一、庶民による日蓮聖人伝の作製

小川泰堂は慶応三年（一八六七）『真実伝』を出版するにあたり、その序で「日蓮大士一代の事蹟は行学院日朝聖人の化導記（元祖化導記）円妙澄師の註画讚（日蓮聖人註画讚）また日省師の高祖伝（本化別頭高祖伝）六牙潮師の別頭統紀（本化別頭仏祖統紀）建立玄得二公の高祖年譜（本化高祖年譜）これらに至って善尽し美をつくすといへども、其文高く其旨遠くして、在家の不眼にはその善美説解がたし」と述べ、日蓮宗僧侶作製になる従来の祖師伝に対する評価をおこなっている。これはまた、泰堂の『真実伝』出版の意図を明らかにしたものであった。事実、これを踏まえた『真実伝』は見事に成功し、祖師伝出版史上、記録的な出版となるのである。

すなわち、慶応三年に出版された『真実伝』が、その後いかに普及していったかは△第一表▽△第二表▽に示した通りである。本表は武智漣光氏の研究^③によったものであるが、これによれば、『真実伝』の出版はその後、明治二十一年一月東京銀花堂で出版して以来昭和十一年七月の京都永田文昌堂版まで、東京・京都を中心に諸種の『真実伝』が出版されたことがわかる△第一表▽。わけても、大正七年五月に京都の平楽寺から出された『真実伝』は昭和九年五月までの間に、実に二十版を数える△第二表▽。一

<第一表『日蓮大士真実伝』の諸版>

出版年代	出版社	出版年代	出版社
明治 20年 1月	東京銀花堂版	大正 10年 1月	東京師子王文庫
明治 20年 1月	// 鶴声社版	大正 10年 6月	// 日宗社版
明治 20年12月	// 精文堂版	大正 12年 4月	// 欽英堂版
明治 26年	// 日宗新報社	昭和 5年 8月	// 妙法会版
明治 29年10月	京都風祥社版	昭和 6年 4月	京都風祥堂版
明治 29年10月	// 平樂寺版	昭和 6年10月	東京扶桑閣版
明治 31年12月	東京春風堂版	昭和 10年 3月	// 宋元社版
明治 44年12月	// 集文館版	昭和 10年 5月	// 三教書院版
大正 5年 5月	// 文正社版	昭和 11年 7月	京都永田文昌堂
大正 7年 5月	京都平樂寺版		

<第二表大正7年平樂寺版『日蓮大士真実伝』の版行>

1	大正 7年 5月 7日初版	11	大正 13年 5月 15日十一版
2	// 7年10月 1日	12	// 13年11月20日
3	// 8年 3月 1日	13	// 14年 3月10日
4	// 8年10月20日	14	// 14年 8月20日
5	// 9年 9月15日	15	// 15年 1月 5日
6	// 9年11月10日	16	// 15年 8月15日
7	// 10年 1月15日	17	昭和 3年 5月 1日
8	// 10年 2月16日	18	// 4年 1月 5日
9	// 10年10月25日	19	// 4年 7月15日
10	// 12年12月15日十版	20	// 9年 5月20日二十版

<第三表>

出版年代	書名	冊数	著者	備考
慶長 6 (1601)	日蓮聖人註画讚	1	日澄	漢文
〃 6 (1601)	元祖蓮公薩埵略伝	1	日修	漢文
〃 10 (1605)	日蓮聖人註画讚	1	日澄	漢文
〃 13 (1608)	日蓮聖人註画讚	1	日澄	漢文
元和・寛永期	元祖蓮公薩埵略伝	1	日修	漢文
寛永 2 (1625)	日蓮聖人註画讚	1	日澄	漢文
〃 4 (1627)	〃	1	〃	漢文・絵入
〃 7 (1630)	〃	〃	〃	和文
〃 9 (1632)	〃	3	〃	和文・絵入
〃 13 (1636)	〃	3	〃	漢文
万治 1 (1658)	竜華歴代師承伝	1	元政	漢文
寛文 6 (1666)	元祖化導記	1	日朝	漢文
〃 9 (1669)	日蓮聖人註画讚	1	日澄	
〃 9 (1669)	元祖蓮公薩埵略伝	1	日修	漢文
〃 11 (1671)	日蓮聖人註画讚	3	日澄	和文
延宝 9 (1681)	日蓮大聖人御伝記	10		和文
天和 3 (1683)	日蓮聖人註画讚	2	日澄	和文・絵入
享保 1 (1716)	日蓮大上人御和讚	1		和文・かな付
〃 6 (1721)	日蓮御一生記	3		絵入
〃 21 (1736)	本化別頭高祖伝	3	日省	漢文
天明 1 (1781)	本化高祖年譜	1	日諦・日耆	漢文
〃 1 (1781)	本化高祖年譜攷異	3	〃	漢文
寛政 9 (1797)	本化別頭仏祖統紀	28	日潮	漢文
〃 12 (1800)	日蓮上人御一代記	1		和文・かな付・絵入
〃 12 (1800)	絵本日蓮記	1		
〃 12 (1800)	日蓮大菩薩記	1	加倉井忠珍	漢文
享和 2 (1802)	〃	1	〃	〃
〃 3 (1803)	絵本日蓮大士一代記	5		和文・かな付・絵入
文化 2 (1805)	日蓮上人御一生記	3		
〃 2 (1805)	本化高祖紀年録	10	深見要言	和文・絵入
〃 2 (1805)	本化高祖累歳録	2	〃	〃
〃 11 (1814)	日蓮大菩薩一代記	2	日澄	和文・かな付・絵入
文政 6 (1823)	高祖大師年代記	1	平維貞	和文
天保 3 (1832)	〃	1	〃	〃
〃 12 (1841)	竜華年譜並備考	1	日麗	漢文
〃 14 (1843)	日蓮大聖人御伝記	10		和文・絵入
弘化 4 (1847)	弘化新刻本化高祖年譜	1	日諦・日耆	漢文
〃 4 (1847)	弘化新刻本化高祖年譜攷異	3	〃	漢文
安政 5 (1858)	日蓮聖人一代凶会	6	中村経年	和文・かな付・絵入
慶応 3 (1867)	日蓮大士真実伝	5	小川泰堂	和文・かな付・絵入

方、この平樂寺版と平行して、その間大正十年には東京師子王文庫版・日宗社版が、同十二年に東京欽英堂版、昭和五年に東京妙法会版、同六年には京都風祥堂版・東京扶桑閣版があいついで出版されている。これらの明確な出版部数は知ることができないが、かかる集中的な諸版・版行の要請こそ、その需要すなわち購読者の広がりを示すものであった。

それでは、このような『真実伝』を生み出した時期、すなわち近世後期における祖師伝出版書の傾向はどうであつたらうか。結論から言えば、この時期はまさに庶民による祖師伝の作製・出版の時代であつたといえる。

近世における祖師伝出版書は△第三表▽に示した通りである。それは次の理由から大別、前期と後期の二つの時期に分けることができる。前期は近世初頭から中期にかけて特に慶長から寛永、そして寛文年間に至るまでの漢文・和文・漢文絵入・和文絵入等、種々な工夫を凝らして十一回も出版された日澄の『日蓮聖人註画讚』④（以下、『註画讚』と略称）中心の時期である。しかし、この『註画讚』を含めて近世前期に出版されたのは漢文体祖師伝が多かった。したがって、近世初頭の印刷技術の発達によって写本から版本に転換し、伝播形態が拡大されたとはいえ、この

時期における祖師伝の受容者は、漢文を理解できた僧侶、一部の在家信者という限定された知識階層の人々であつたといえる。

そして、後期がまさに通俗平易な祖師伝が大量に作製出版され、普く諸人の手に渡っていった時期である。その中心は寛政年間以降であつた。

この後期における祖師伝の出版にはさらに二つの傾向がある。それはまた、近世後期祖師伝の大きな特色でもあつた。第一点は室町時代に作製され、近世前期盛んに出版された『註画讚』等が、この時期に極めて平易な伝記本となつて再び出版されることである。例えば『註画讚』は「高祖大師御誕生より御入滅迄一代の事、絵入にして児女のみやすからしめんが為に」平仮名・絵入を主とした平易通俗化した祖師伝として登場する。その書名も『日蓮聖人註画讚』から、わかりやすい『絵入日蓮御一代記』『日蓮大士御一代記絵入』『日蓮大菩薩一代記かな付絵入』と、改題し、装いも新たにして再版されるのである。

第二点は日澄の『註画讚』あるいは日潮の『本化別頭仏祖統紀』等を底本とした、日蓮宗僧侶ならぬ庶民の在家信者側からの多種多様な祖師伝が作製出版されることである。既に紹介した加倉井忠珍・深見要言・平維貞・中村経

年・小川泰堂等、当時の知識階層に属す一部の在家信者による祖師伝もそれである。加えて、名もなき市井の人々による、さらに内容的により低い一連の祖師伝が、かかる在家信者側から盛んに生み出されるのである。

それらの祖師伝は△第四表▽に示した通りである。⑤

日蓮聖人の誕生から入滅まで、波瀾に満ちた生涯の主な事跡を年代順に挿画を入れてやさしく説きあかした内容は、全て『註画讀』の三十二の編目を底本にして作製したものであった。短いものでは僅か七紙、長いものでも二十四紙の短編で、平仮名・絵入りの極めて平易な祖師伝である。同じ在家信者の手になる『真実伝』等とは明らかに異なっている。その内容から考えて、かかる祖師伝を受容した読者は平仮名程度の読み書き能力を有した文化的により低い庶民階層であったことを示すものである。

したがって、これらを含めて近世後期の祖師伝は、そのいずれにも仮名を附し絵入りにした平易通俗を旨とする。まさしく庶民のために出版されたところにその特色があったといえよう。つまり、近世後期に至って諸人の間にこうした祖師伝が急激に求められたのである。かつて、元禄年間出版された『日蓮大士一代記』が、享和三年(一八〇三)に再び「今時殊に御威光増益して、其巻を覓る輩屢多

<第四表>

出版年代	書名	冊数	著者	備考
天保4 (1833)	日蓮大聖人御一代実記	1	彦右衛門	和文・かな付・10紙
不 明	日蓮大菩薩御一代記	1		和文・かな付・7紙
"	日蓮上人絵図	1		平かな・絵入・24紙
"	日蓮聖人御一生記	1		" " 16紙
"	日蓮上人御一生記	1	宮入清太郎	" " 13紙
"	日蓮御一代記	1		" " 16紙
"	高祖御一代略記	1		" " 13紙
"	日蓮大菩薩御一代図会	1		絵のみ 7紙
"	新版日蓮聖人御一生記	1		平かな・絵入・一枚摺
"	高祖大師行状曼荼羅	1		" " "

し、依て画者に託して始末を潤色さしめ、再び梓行して一宗の女兒に与へんと書林志をおこし」^⑩て出版されたときは、書林側の慌しい動きと共に、近世前期に見る特定の受容者から上下普き階層へ祖師伝が普及していったことを示すものである。^⑪

かような寛政年間以降における多種多様な祖師伝の盛んな出版は、近世中期以降次第に表出していった祖師信仰の隆盛^⑫による、祖師に対する信仰・帰依・関心の非常な高まりによるものであった。しかしまた、かかる人々に日蓮聖人の生涯や祖師像を教えていったという意味で大きな役割を果たしたともいえる。そうした中で泰堂は多くの祖師伝を踏まえつつ慶応三年に『真実伝』を出版する。それは彼の『真実伝』著作出版の意図、そして完成した『真実伝』は既刊の祖師伝といかなる異りがあったのだろうか。

二、小川泰堂の『日蓮大士真実伝』

小川泰堂は文化十一年(一八一四)医者小川孝栄天祐の長男として藤沢に生れた。父は医業のかたわら、時宗藤沢清浄光寺から屈請されて同寺の談林に困漢を講じ、市河米庵太田南畝等と交流するなど当時の知識階層に属す人であった。泰堂はこうした中で少年期を過ごす、十八才で医学

習得のため大窪天民、辻元崧菴に就学し、天保七年(一八三六)には二十三才で神田弁慶橋で医業を開いている。

小川家の宗旨は時宗で、菩提寺清浄光寺との関係は単に信徒というだけでなく、父孝栄が同寺談林の講師をするなど密接な関係にあった。泰堂がその時宗から日蓮宗に改宗したのは、天保九年(一八三八)二月で、二十五才の時であった。改宗の動機については、泰堂自身後年次のように書き記している。すなわち、二十五才の時病家回診の帰り浅草蔵前の古本屋で録内御書二十一巻の一冊「持法華問答抄」を読み、日蓮聖人の教えの深さと広さに飄然と帰依の心を発し、さらに録内録外御書を通読して、禅念仏等諸宗の遠く及ばない仏法秘妙の極説なる事を悟ったという。

その後、施薬・診療のかたわら講演・座談等、教導の活動を行なうが、弘化二年(一八四五)父の死去により藤沢に帰り『遺文録』の校訂に全力を傾むける。そして、明治十一年十二月、六十五才でなくなるまで安政六年に中村経年の『日蓮上人一代図絵』(以下、『一代図絵』と略称)の校閲、文久三年には宗門の覚醒を促してその要路に呈した「信仏報国論」を述作し、慶応元年には『遺文録』三十巻を完成、同三年には『真実伝』五巻を出版する。さらに明治八年には強烈な日蓮主義と国家意識にもとづく政治的宣

言である「王法仏法沿革合一之図」を述作して教部省に提出する等、一連の著作活動を続けるのである。^⑨

ところで、泰堂はかかる著作活動のうち、いかなる目的で『真実伝』を著作し、出版したのであろうか。既に紹介したように、泰堂はかねがね日蓮宗僧侶の手になる祖師伝は在家の役に立たないとして、婦女童幼の爲の祖師伝の必要性を主張している。そして、この『真実伝』の述作は、実は泰堂が安政六年（一八五九）中村経年の『一代図絵』の校閲を行なったことが、大きな意味をもったと考えられるのである。それは次の理由による。

『真実伝』はこの『一代図絵』を底本とし、全体の構成を変えることなく、泰堂流の文筆力によって、より生きいきとえがき直した祖師伝である。『一代図絵』は漢文体祖師伝である日潮の『本化別頭仏統紀』（以下、『別頭統紀』と略称）を忠実に、そして平易に書き下したにすぎず、いわゆる諸人受けのする祖師伝ではなかった。したがってかかる点に物足りなさを感じた泰堂が、『一代図絵』を底本とし諸人の要請に応えうる祖師伝に語り直したのが『真実伝』ではなかったかと考えられるからである。以下、泰堂の『一代図絵』の校閲、「信仏報国論」の述作、『遺文録』校訂と『真実伝』との関連を考え、本書著作の意図に

ついて考えてみたい。

安政六年（一八五九）泰堂は中村経年の『一代図絵』の校閲を行なっているが、何故校閲をしたのかも、また、経年との結びつきもわからない。しかし、経年は熱心な法華信者で、読本・人情本等多くの著述を残している江戸時代後期の戯作家であった。この『一代図絵』のほかに『観音経略図解』を著し、文久二年（一八六二）に出版している。

経年が『一代図絵』を著した意図は、本書の序で小湊誕生寺日球が述べているように、「日蓮聖人の一代記は六牙潮師の別頭統紀にて大成されたようであるが、文章広博、意味深長で童蒙の徒にとつては理解しにくい。そこで潮師の別頭統紀を憑み、あらましを取って文を和らげ、諸伝の異説をあげ、図絵を加えて逆機の兎輩の為に書いた」ものであった。事実、日潮の『別頭統紀』の漢文体祖師伝を忠実に平易な書き下し文とし、『註画讀』深見要言の『本化高祖紀年録』等の異説を度々引用しては独自の解釈をほとんどすなど、かなりの批判性もある。しかし、日蓮聖人の事跡に関してはその真偽について何等論ずるところがない。むしろ、それにも増して『別頭統紀』にない日蓮聖人の奇瑞・奇跡を他の祖師伝から挿入して、超人的・神秘的祖師

像を構築していった点に本書の特色があるといえる。

そして、実はこの『一代図絵』を底本として、泰堂流の文筆力によって書き改めたのが『真実伝』であることが両書の比較から看取できる。泰堂はその序で「又御一代の中に小室に法力を競べ、普門の伊豆に訪ひ、日輪の中に不動を拝み給ふなど、正法もとより不思議なしといへども、其奇怪変態に過て、宗門の法則に合ざる事は置て論ぜず。漏れたるにあらざり載ざるなり」とし、『一代図絵』にある小室における法力競い等を除いた。しかしまた、新たに『一代図絵』にない事跡を挿入したり、竜口法難、二度にわたる蒙古襲来等、聖人の生涯において最も重大な事件の描写には大幅な紙数を費すなどして、単に文献の羅列に近い『別頭統紀』『一代図絵』に比較し、生々とドラマチックにえがいている点をその特色とする。だが、全体の構成は全く変わらず『一代図絵』を踏襲したものであった。したがって、『真実伝』は『別頭統紀』↓『一代図絵』↓『真実伝』の系譜により成立したと考えられる。

その後、泰堂は文久三年（一八六三）四月、幕末の社会状勢を危機意識として受けとめ宗門の覚醒を促した「信仏報国論」（以下「報国論」と略称）を述作する。この「報国論」の思想は『真実伝』にいかんにか反映したであろうか。

「報国論」述作の理由は次の通りである。当時、国内では天保七年（一八三六）より安政五年（一八五八）に至る天変地異により諸国飢饉は全国に及び、特に天保七年の奥羽地方では死者十万人を数えた。そして、この年から百姓一揆、うちこわしはますます激化していった。一方国外的には弘化三年（一八四六）に朝廷が幕府に対して海防を厳にせよとの沙汰書を出したように、米英露各国のいわゆる黒船の来航が国家的紛争をまきおこし始めていた。かかる諸事件が泰堂を政治的な面に眼を向けさせ、「報国論」の述作となったのである。すなわち、

「万々の僧俗清浄堅固の信力を合せて国土を守護なさば
經力仏力感応道交し、天地不例の悪気自然と順流し日月
清明にして風雨時を違へず、民心和融していつしか邪曲
を離れ、伐たずして退き、教へずして化し、堯年舜日四
海泰平にいたるべし。これ其昔蓮祖安国論を書いて上下万
民を誡めたると表裏の違ひはあれども、時世に協ふ本化
の立行利益においては必定変相ある事なし」

としたが、これはまさに正嘉元年の鎌倉大地震を始めとして、正元二年に至る地震暴風疫病等の天変地変の発生が、日蓮聖人の眼を政治権力に向けさせ、文応元年七月十六日に奏上した『立正安国論』に擬するものであった。そして

「釈尊雙林最後の金言に仏法を信ずる者は爪上の土なるべしといひ、蓮祖開目抄に各口には信心深きやうにいへども心肝に染て信ずる者は百千万人に一人もなしと記しおかれたり。設令億万人に一人なりとも此等の意を得て大法を骨髄に会得し、謗法三毒の濁穢を受ず、身を修め職を励み自行折伏の修行弛まざる者あらば、寸信の微力よしや国土を擁護するに足ずとも、恩を知り國に報ずるの仏者にして法華正脈の人たるべし。」

「今末法に入りて八百二十年、これより教法流布万年の間は、僧俗ともに自行折伏の修行をもって大法を護持し國家を守護すべき事これ必然の道理なり。……畢竟草沢の俗子この大事に預るべからずといへども、聊か報國の寸心を演べて仏天の照覽に備ふるのみ。」

と結んで日蓮宗諸本山、宗門要路に呈したのである^⑩。

『報國論』に見るかかる思想は、『一代図繪』を踏まえつつも『真実伝』に明確に反映した。それは日蓮聖人を救國の『愛國者日蓮』として見事にえがき出していったのである。

すなわち、愛國者としての日蓮聖人を最も強く押し出すのは蒙古問題である。

「時に人皇九十年代、宇多天皇歡慮を苦しめ給ひ、鎌倉に

勅命有て、將軍惟康親王日ならずして御進発には定りたれども、日本の危急人力に協はず、兼て数ヶ度の忠諫におよびたる正法の行者、日蓮聖人に護念の力をからんものと、遠く身延山に仰ありけるにぞ、高祖大土國恩を報じ奉るは唯今なりと……輪円具足の大曼陀羅を御執筆ありてこれをささげ給ふ。……九州の軍勢刃に血塗らずして、十二分の勝利を得たる事、ひとへに法華経の威力、日蓮聖人の守護なり。」

とは『真実伝』における弘安四年の有名な弘安の役の記述である。論述の典拠はまさしく『別頭統紀』『一代図繪』を踏襲したものであるが、そこにえがかれた日蓮聖人は、救國の『愛國者日蓮』として更に一步押しすすめられている^⑪。

また『真実伝』出版の二年前の慶応元年（一八六五）十月、『遺文録』三十巻の稿本を完成した。二十五才の時、御書を読んで深く聖人に帰依すると共に、その版本の誤謬多きを嘆き、その訂正を志したものであった。これより先、智英日明（一七五〇—一八二一）は御書の改正を發願し、諸山に真蹟を探って編纂を意図し、文化十一年（一八一四）十月、三千八百紙五十巻を得て『新撰祖書』としたが、校正が完了せず草稿のまま遷化してしまつた。その後

泰堂がこの日明の『新撰祖書』の稿本を写し、これを底本として更に字句の校正、偽書の除去、系年の修正等、従来の諸家の業績を参考し、また「正中山二入り真蹟ヲ自照スルノ日、イマダ世ニ現レザル数篇ヲサへ模写シテ新ニ入録シ」^⑧ たりして、日明が志を果さなかった諸山の真蹟対照をも行ない、録内録外の別を改めた三百八十七篇の御書を編年体に編纂したのである。この編年御書の成立は、遺文編纂史上、画期的なことであった。そして、『遺文録』は泰堂歿後一年、明治十三年に編年御書最初の刊本として出版され、世に大いに流布した^⑨。また明治以降における刊行御書は、多くこの『遺文録』を底本として改編したものであることも忘れてはならない^⑩。

しかしながら、「イマダ世ニ現レザル数篇ヲサへ模写シテ新ニ入録シ」た泰堂の長年にわたる『遺文録』校訂の眼は、表面的には何等『真実伝』に反映されなかった。すなわち、『遺文録』の校訂者であり、御書に対する並み並みならぬ学識を有する泰堂が^⑪、真偽混合した御書によりあるいは伝説・伝承を豊富に盛り込んだ祖師伝である『一代図絵』を基本的に批判することなく踏襲して『真実伝』に引き継いでいるからである。そこには『遺文録』校訂者としての泰堂の学識を踏まえた「新祖師伝」といったもの

は見出すことができない。

したがって、既に述べたように『真実伝』が一層「愛国者日蓮」のイメージを強調したものにせよ、それはやはり『一代図絵』を踏まえたものであった。つまり換言すれば泰堂はあくまで同じ在家信者中村経年の『一代図絵』の立場を重視し、これを生かしつつ一步押し進めて、諸人の要請に応えうる祖師伝とすることに重点をおいたのではなからうか。以上は推測にすぎないが、ここに泰堂の『真実伝』述作の意図があり、『一代図絵』の校閲が大きな意味をもったのではないかと思われる。

三、庶民の御書平易化とその出版

祖師伝の平易化と共に、庶民の御書平易化とその出版が在家信者側から盛んに行なわれたことも近世後期の特色といわなければならない。

御書出版の創始は、慶長年間身延日重・日乾・日遠により、身延山で出版された『五大部御書』の百部印本である^⑫。その後、出版技術の発達と専門書林の発展によって多くの御書が出版される。しかし、在家にして私財を投じみずから校訂に従事し、出版したのは文化五年（一八〇八）の深見要言の五大部をはじめとする『本化高祖御書』（八冊）

が最初であった。

深見要言は奥州菊田郡名古曾の関九面村（きゅうめんむら）の生れで、名は徳一、字を至厚と称した。始め真言宗を奉じたが、五年程眼病に悩み、祖師ならびに七面の神に十年の願をかけ、二十三年の間に三十度の身延参詣を行ない、ついに眼病をなおして日蓮宗に改宗したという。そして、謝徳のために法華十六万部の経題を課誦し、自説の題目五千部、仏像を刻むこと五体、七面山には紺紙金泥の法華経を納める熱烈な信仰者であった^⑧。著作したものは、この『本化高祖紀年録』『本化高祖累歳録』の祖師伝、『立正安国論説義』『高祖御書略』の御書を出版し、「重乾遠三師伝」「日親大上人行状記」「行学院日朝上人伝」の高僧伝を著わす^⑨など非常に多い。

『本化高祖御書』の校訂、出版は『高祖年譜』の著者、水戸の日誦が日蓮聖人の五百遠忌記念事業に、真筆対校御書を出版する目的で、諸本山の真筆御書の対校を要言に依頼したことからはじまる。その後、要言は間もなく死去した日誦の意志をついで、真筆対校御書の底本作りにつとめ寛政十二年（一八〇〇）四月には中山法華経寺蔵の本尊抄・立正安国論・法華取要抄など三十六点と京都本法寺蔵の上野殿御返事ほか三書の再校合本を中山八十四世・本法寺

三十八世日道から「御書開板の本願主深見要言」に授与されたりして本書を完成させるのである^⑩。この事実は後年、小川泰堂が『遺文録』校訂のために、諸本山あるいは中山の宝蔵に入り、自由に真筆と対照しえたことと軌を一にする。つまり、在家居士深見要言の御書研究の立場とその学識の深さを示すものといえよう。

一方、かかる深見要言の高尚な御書出版と平行して、同じく在家側から読みやすい平仮名本に平易化した御書が出版される。例えば、江戸神田の書林華陽堂本爺彦右衛門・華坊兵藏父子による御書出版がそうである。父彦右衛門は「法華信士扶桑真人本爺彦右衛門」^⑪と称した日蓮宗の信奉者で、天保四年（一八三二）には自ら通俗的な祖師伝である『日蓮大聖人御一代実記』あるいは『日蓮山伏法力評』『禅天魔真言亡国律国賊之論』等の啓発的な書を著わしては自らの書林で出版している。また同じ天保四年には仮名を附し平仮名本にした立正安国論・甲州身延山御抄を出版したほか、観心本尊抄・開目抄・如説修行抄・念仏無間地獄抄・当体義抄等多くの御書に仮名を附し平易化して出版する。そして、その一子、華坊兵藏も自ら抜粹し著わした『日蓮宗浄土宗安土問答』を出版したほか、前記父の著作を始め『法華座敷談義』『自我偈俗解』『釈迦如来御

一代記』『法華隨方抄』『身延參詣高祖諸國靈場記』等、主として日蓮宗関係の書籍を盛んに出版する。かくして、日蓮宗僧侶ならぬ在家信者父子によって著作・出版された祖師伝あるいは平易化された御書、また深見要言の『立正安国論説義』等の註釈書は、江戸・京都・大阪三都の売捌書林を通じて全国に普及していったのである。

ここで、当時の在家居士の手になる祖師伝あるいは御書が出版される場合の手續きについてふれる。当時、日蓮宗においては書籍を出版する場合、先ず本山の承諾を得る、「本山届け」が必要とされた。文化九年（一八一二）八月大阪の書林播磨屋本三郎が板元となり、中川采藏なる者の著わした『日蓮上人行状図会』八冊の出版を幕府に出願したが、次の理由で却下されている。すなわち、出願の「附記」によれば、

本書板行の義出願したるに文化十年四月十三日「本山届け相済み候上にて願出づるべし」とて却下せらる。本山届けとは日蓮宗本山の承諾を意味するなり。書中文面ノ儀、宗旨本山届未済ニ付相糺可申為開板願出取下、稿本下戻[㊟]。

とある。つまり、本山の承諾を得ていないから、それを済ませてもう一度出願せよというのである。

もちろん、俗士に限らず僧侶の場合においても同様の手續きを要したのであろう。俗士の著作の場合、いかなる内容のものが本山においてチェックされたかが知りたいところであるが史料的に不明である。しかし、たとえ本山の承諾を得ても必ず出版されるとは限らない。幕府の「出版令」を通過しなければならなかったからである。

同じく文化十一年（一八一四）十二月、大阪の書林は日華作の『法華惣成仏抄』三冊附録法華初心教化抄の出版を幕府に出願したが、次の理由で却下された。「附記」によれば、

本書板行の義出願したるが「此書諸宗旨を批議し畢竟宗論にも似寄りたる書物ゆえ御聞濟みこれなし」として却下せらる[㊟]。

とある。つまり、本書が諸宗旨を批議するとの理由で却下されたのは、おそらく享保七年（一七二二）十二月十六日付令の「出版令」（これはその後の出版物取締りの規準となった）の一条、

一、自今新板書物之儀儒書、仏書、神書、医書、歌書都而物類其筋一通り之事ハ格別猥成儀異説等ヲ取交作り出シ候儀堅ク可為無用[㊟]事

に違背するものとされた為であらう。もちろん、こうした

手続きは日蓮宗だけでなく諸宗においても同様であった。

さて、再び本題にもどるが、文化十三年（一八一六）いみじくも大阪の書林から「法華初心成仏抄」が、「此書は高祖大士御妙判録内二十三卷法華初心成仏抄なり。此書俗家にては解しがたき事も多し故に今平仮名を以て是を註釈し宗門信仰の輩に与ふ」^⑧として出版された。これは、この時期における祖師に対する関心つまり祖師信仰、祖師伝の普及と共に、かかる平易化した御書が求められたことを示すもので、先の彦右衛門父子による御書出版も、まさにそうした読者の要請に対応したものであったといえよう。

既に述べてきた小川泰堂の『遺文録』の校訂『真実伝』の出版も、かかる一連の在家信者の著作活動による仏教運動の一つとして、その系譜に連なるものであった。そして祖師伝・御書が庶民の上下層に受容されると共に、その受容者である在家信者側から逆に平易化した祖師伝・御書・註釈書の作製、出版といった積極的な動きを起していく。むしろ、ここでは近世後期におけるこうした在家信者側の動向こそ重視すべきであろう。なぜなら、このような祖師伝の作製あるいは御書の平易化による普及活動といった在家信者側からの仏教運動が、伝統的な寺院仏教の域外で

こなわれ始めていった点に、やがて近代仏教に——近代仏教を在家を中心とした在家仏教とするなら、それに——受け継がれていく萌芽が見出しうるのではないかと思われるからである。

おわりに

文久三年、当時の社会状況を危機意識として受けとめた小川泰堂は、「報国論」を述作し、宗門要路に呈しその覚醒を訴えた。そして、明治五年国民教化の中央機関として教部省が設置されたが、これに対して泰堂は明治八年十二月、建白書「王法仏法沿革合一之図」を述作して教部省に提出する。これは泰堂の熱烈な日蓮主義と国家意識にもとづく政治的宣言であった。彼の政治的見解は明らかに王政主義である。それは明治維新を迎えて「国と民とは天子の有なり、天子は太陽の如し」あるいは「太陽は天子、藩侯は星」^⑨などと批判していることからも明らかである。

「王法仏法沿革合一之図」は先ず、

「王法ト仏法トハ天地日月昼夜ノ如ク、又両輪ヲ輾テ車ノ行キ雙翼ヲ搏テ鳥ノ飛ブニ異ナラズ」

「王法ハ人倫ヲ正シテ国事ヲ主宰シ、仏法ハ兆民ヲ訓導シテ止悪勸善ノ利益ヲ施ス。彼ノ王法ト合体一致シテ率

土常ニ安定ス是レ世界ノ大道也」

とし、

「当世ノ念仏禪真言等ノ宗宗ハ其ノ臣庶ノ末経ヲ本旨ト成シ経王華ヲ侵凌シ取立タル下尅上ノ宗門也」

と極めつけ、訓導すべき唯一の教法は、

「教法ト云フハ仏教、仏教ト云フハ法華也。法華ノ外ニ仏教ナク、仏教ノ外ニ教法ナシ」

と主張した。そして、今や、

「一天ノ制度王家ニ帰シ、四海ノ教法モ亦一宗ニ定ルノ時節到来セリ。願クハ桓武帝ノ朝ニ比例シ、日蓮法華宗ト諸宗トノ天淵黑白邪正ノ法理ヲ逐一朝廷ニ裁決有テ彼ノ諸宗ヲ停止廢絶セシメ、唯一乘法ノ一ト成シ、法華本門ノ戒壇ヲ王室ノ近傍ニ建立シ、是レヲ大教授院ト称シ釈迦仏ヲ立テ本尊トナス。此レヲ禮拜スルモ敬神シ愛國ノ道ニ違フ事ナシ。……此ノ大道場ニ於テ貴賤尊卑ノ別ナク法華本門ノ大戒ヲ受テ題目ヲ唱讚シ、十界昇沈ノ理ヲ明メテ、本因本果ヲ會得シ、衆惡ニ惑溺セズ、皇國ノ恩、父母ノ恩、敬導ヲ受ケシ仏法僧ノ恩、又衣食住ヲ以テ我身ヲ保護セラルル衆庶ノ恩、此四恩ヲ知ツテ、万民悉ク本國土ニ安住スルニ至ラバ、敬神愛國等ノ朝典廣ク諸洲ニ輝キ遠ク万年ニ流布スベシ」^②

と説いたものであった。

しかし教部省はこれを黙殺した。

一方このような小川泰堂の行動に平行して、遠く四國の高松藩主の子で、高松本門八品を開いた在家居士松平頼該も、当時の社会状勢を危機意識として受けとめ、泰堂と全く同じ宗教活動を展開していた。特に泰堂が「報國論」を述作した文久三年、天保以来の攘夷論の勃興と共に高松藩にも内勅が下り、海岸防禦の義が出されたが、これに対し頼該は、翌元治元年（一八六四）三月、天下泰平國家安全の御祈禱の勅命を蒙らんことを上奏した。その理由は、日蓮聖人の『立正安國論』の趣意により、外夷防禦の根本策は、その國に邪教横行して上一人より下万民に至るまで正しき法華信仰を失っていることに原因するのであるから、砲台や鎗砲ではなく法華経の正しき祈りであるとするとされた。

かかる松平頼該の開いた高松本門八品講の成立と展開についての詳論は別稿に譲ずる。ここでは、西と東にわかれた在家居士の頼該と泰堂が、当時の社会状勢を同じように危機意識として受けとめ、同時に軌を一にした宗教活動を行ない始めた点に注意しておきたい。両者の動きをただその思想的基盤において同じだからと、簡単に評価してしま

えばそれまでであるが、その行動は既に在家居士の単なる著作活動を超えた、すぐれて政治的な動きであった。そして、総じてかかる在家居士の動向は当時の日蓮教団の中にいかに位置づけられるのか。他日を期したい。

(43・12・30稿了)

註

- ① 小崎庸之・笠原一男編『宗教史』(体系日本史叢書18)等
- ② 近世初期の日蓮宗宗学出版書の動向については、拙稿「近世初期日蓮宗出版史の一考察」(『大崎学報』120号)で、祖师信仰にともなう祖师伝出版の動向は、「近世における日蓮聖人伝の出版」(『日本仏教』22号)で考察した。
- ③ 武智澁光「真実伝雑考」(小川雪夫『小川泰堂伝』所収)
- ④ 「日蓮上人伝記集」(『日蓮宗全書』所収)および『国文東方仏教叢書 伝記上』所収
- ⑤ 山梨県立図書館甲州文庫所蔵本等による。
- ⑥ 享和三年刊『日蓮大士一代記』「序」
- ⑦ 拙稿「近世における日蓮聖人伝の出版」(『日本仏教』27号)
- ⑧ 高木豊「日蓮宗の開帳と縁起」(『大崎学報』113、114合併号)
- ⑨ 以上の略伝は、小川雪夫『小川泰堂伝』による。以下、同書に負うところが多い。謹んで深謝する次第である。
- ⑩ 小川雪夫『小川泰堂』
- ⑪ 明治以降における記録的な「真実伝」普及の理由の一つにかかる点が考えられる。明治期における『真実伝』の受容基盤の一つとして、近世後期における素朴な祖师信仰をそのまま

受けついだとすることも勿論考えられる。さらにまた、明治三十年代後半に愛国者日蓮像が出家・在家にわたって滲透していた(高木豊「近代の日蓮論」八望月歡厚編『近代日本の法華仏教』三九五頁)ように、日蓮聖人を熱烈な愛国者としてえがき出した『真実伝』は、そうした中に容易に受容されていく多くの要素を備えていたといえよう。

⑫ 『高祖遺文録』

⑬ 鈴木一成「日蓮聖人遺文の文献学的研究」一四一頁

⑭ 『遺文録』は明治初期に出版された後、『類纂高祖遺文録』として再編出版され、二十版を超えて普及した。また一方、明治後期出版の加藤文雅編の『蓋良閣版縮冊』『日蓮聖人御遺文』の底本となり、これも数年おきに重版し、もっとも広く近代に普及していった。かように、近世末期の日明の『新撰祖書』とそれをひきついで完成させた泰堂の『遺文録』は、近代における御書の編集と出版の基礎となったものであり、そこに果した役割とその意義を認めることができる。(兎木正亨校注『日蓮文集』「解説」)

⑮ 泰堂は二十五才で日蓮宗に改宗したが、その翌年の天保十年(一八三九)十一月、浄土宗親阿が、文禄四年に著わした『四箇度宗論記』(『大日本仏教全書』宗論叢書第一所収)に対して「曲林一斧」(前掲書所収)を著して反論したという。四箇度の宗論とは(一)文治聖浄論(浄土宗対天台宗)、(二)文亀真偽決(対日蓮宗)、(三)天正邪正決(対日蓮宗)、(四)慶長虚実決(対日蓮宗)をさす。文政八年(一八二五)に浅草の僧称蓮社唯答が、本書を再版したことに反駁したものである。但し、『曲林一斧』の著者を直ちに小川泰堂とすることに多少の疑義があるようである。その理由は、一つは著者名として「東海相陽斗筭楚人泰山返質」とあるのみで小川泰堂の

名を見出せないこと。もう一つは、二十五才でしかも、改宗した翌年にかかる反論書を書くことができたかとの疑問である。しかし、泰堂自筆の著書目録に『曲林一斧』が記載されている（小川雪夫『小川泰堂伝』七十六頁）とするならば、泰堂の著作として間違いないであろう。むしろ、改宗一年目にして、かかる反論書を書いた泰堂の日蓮宗に対する学識を認めるべきであろう。

⑩ 拙稿「近世初期日蓮宗出版史の一考察」(『大崎学报』120号)

⑪ 深見要言『本化高祖紀年録』「序」

⑫ 『日蓮宗宗学章疏目録』による。

⑬ 兜木正亨校注『日蓮文集』「解説」三六六頁。なお、その出版経過については同書参照。

⑭ 彦右衛門著『禅天魔真言亡国律国賊之論』

⑮ 『享保以後大阪出版書籍目録』

⑯ 『享保以後大阪出版書籍目録』

⑰ 小林善八『日本出版文化史』三六八頁

⑱ 文化十三年刊『法華初心成仏抄』「識語」

⑲ 小川雪夫『小川泰堂伝』

⑳ 小川雪夫『小川泰堂伝』